

第92回 日文研フォーラム



# 奈良時代の文化と情報

Information and Culture in Nara Japan



アレキサンダー N.メシェリャコフ

Alexander N. Meshcheryakov

---

国際日本文化研究センター



日文研フォーラムは、国際日本文化研究センターの創設にあたり、一九八七年に開設された事業の一つであります。その主な目的は海外の日本研究者と日本の研究者との交流を促進することにあります。

研究という人間の営みは、フォーマルな活動のみで成り立っているわけではなく、たまたま顔を出した会や、お茶を飲みながらの議論や情報交換などが貴重な契機になることがしばしばあります。このフォーラムはそのような契機を生み出すことを願い、様々な研究者が自由なテーマで話が出来るように、文字どおりインフォーマルな「広場」を提供しようとするものです。

このフォーラムの報告書の公刊を機として、皆様の日文研フォーラムへのご理解が深まりますことを祈念いたしております。

国際日本文化研究センター

所長 河合 隼雄



● テーマ ●

# 奈良時代の文化と情報

Information and Culture in Nara Japan

● 発表者 ●

アレキサンダー N.メシェリャコフ  
Alexander N. Meshcheryakov

ロシア科学アカデミー東洋学研究所教授  
Prof., Institute of Oriental Studies, Russian Academy of Sciences  
国際日本文化研究センター来訪研究員  
Visiting Reseachter, Int'l Research Center for Japanese Studies



1997年1月21日(火)

## 発表者紹介

アレキサンダー N.メシェリャコフ  
Alexander N. Meshcheryakov  
ロシア科学アカデミー東洋学研究所教授  
Prof., Institute of Oriental Studies, Russian Academy of Sciences  
国際日本文化研究センター来訪研究員  
Visiting Researcher, Int'l Research Center for Japanese Studies

1951年 ロシア・モスクワ市生まれ  
1973年 モスクワ国立大学アジア・アフリカ諸国学部卒業  
1976-現在 ロシア科学アカデミー東洋学研究所  
1979 歴史修士学位獲得  
1992 歴史博士学位獲得

### 主な著書：

古代日本の神仏習合 ナウカ社 1987.  
古代日本の文化と文書 ナウカ社 1991.  
古事記 ロシア語訳（下巻）、シャル社 1994.  
日本霊異記 ロシア語訳 ギベリオン社 1995.  
紫式部日記 ロシア語訳 ギベリオン社 1996.  
日本書紀 ロシア語訳 ギベリオン社 1997.

## 問題の提起

現代社会というのは情報社会だとだれにも思われていて、そして誇りにもされていることは、ある意味では否定できないでしょう。なぜならといいますと、情報なしで現代社会の存在は絶対あり得ません。けれども、現代人の自慢の△情報▽は現代だけに適用・限定されるのでしょうか。古代、中世も情報の流通・交換が勿論、行われていました。ただ、時代によっては、その特徴がだいぶ違って、それぞれの特質が見られるのが事実です。環境と環境に対する考え方、生活様式、習慣、宗教、農業・産業の発展、国内政治、国際情勢等々の広い意味での文化生業の影響を受けながら、時代別の情報の流通・交換の有り様は特徴づけられています。

情報は一定の手段によって伝えられています。古代社会にとっては身振り、音楽、絵、口、文字などがそれです。人間、*homo sapiens* ができた時に、口と身振りしかなかったが、だんだん進歩しながら偉大な発明をして、情報を伝える新しい技術手段を使うようになりました。それとともに情報のインフラストラクチャーもできました。そのなかに楽器、文字、文房具、乗り物、道路、などがあります。

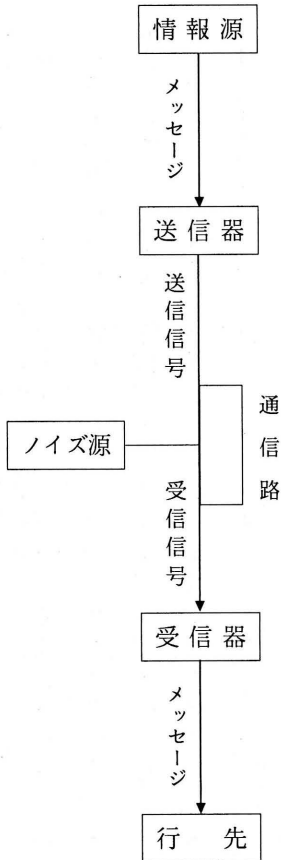
人間社会と情報とは、切ってもきれない関係にあります。古代にしても、現代にしても、情報の流通なしで人間の社会自体が存在しえないといっても過言ではありません。早く、間違いなく情報を相手に届けられるのは社会の充実した進歩、発展の大きな前提です。情報の面で遅れている国・社会は、全面的に遅れるほかはありません。その理由はいろいろあると考えられます。たとえば、人口の少ない領域が広すぎると、空間・スペースそのものが信号の伝達に大きな障害となります。ロシアは広い国土、豊富な資源があっても、情報のインフラスタクチャは、時代を問わず完成していなかったため、国家・国民の同質性がなかなか達成できず、大きな問題を発生させたというのはその典型的な実例でしょう。物理学の空間といっても、人間社会もそうであるが、遠ければ遠いほど、信号が弱くなって、誤解、ゆがめることも多くなります。同じロシアであっても、地域性がいまでも非常に目立っている承知のようです。

奈良時代前後の文化というのは、今の日本文化と多くの点でいちじるしく違いますが、やはり両方ともおなじく日本文化です。いや、奈良時代の文化は、現代日本文化のはじまりだといってもいいでしょう。情報としても、なおさらです。奈良時代には、情報（とくに文字情報）に対する日本人の考え方が形成しはじめ



られていて、そしてそのいくつかのパターンはそれ以降もよくみられています。そのなかのひとつは、その時に文字が普及され、情報の流通、文化全体がいちじるしく変更されたのは、とくに重要な意義をもつものでしょう。それらにかかわる諸問題は山のように多く、私の知識と能力を大幅に越えています。歴史学の一般観点を変えながらその諸問題を取りあげて、少しでも解明させるのが本発表の目的です。今日はこの場を借りてとくに文字文化の情報に集中したいと思いま

(図1) 情報理論による通信系

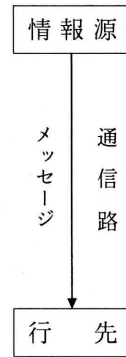


す。情報理論によると、情報伝達は図1のように行われています。

一番分かりやすい例を挙げると、ラジオです。情報源はアナウンサーで、送信器はマイクとラジオ送信機です。マイク前のアナウンサーは声のメッセージを出して、電磁気の波に変えさせて、送信信号となります。その信号は通信路、すなわち空気を通じてトランジスタ受信器まで伝えて、また人間の声に変えて、行先の聞き手に聞こえます。これは通信系といえます。もし天気の様子で雑音が入ったら、天気はノイズ源と見なされています。

この情報理論を歴史学に利用すれば、どうなるのでしょうか。もちろん、そのまま使用できませんが、一応の改正をしなければなりません。送信器と受信器（ラジオ、テレビ、電話、コンピュータ等）のようなものは、前世紀と今世紀に発明されたもので、そのまま奈良時代に適用できません。ノイズ源としても、また同じです。古代文字情報にはノイズがまったくないとはいえないのですが、きわめて少ないと思われる。文書が雨に降られて、文字も薄くなつて、よく見えなくなつた、または戦争などで文書の情報が届けられなかったぐらゐの特殊な例に限られています（違った意味で情報をとらえるケースは別の問題、受信器の人間に内蔵されたノイズ源の問題として見たい）。そういたしますと、歴史学情報

(図2) 歴史学情報理論の通信系



理論からみれば、情報の通信系が図2のようになります。

それでは奈良時代、律令国家に当たっての情報源、行先、通信路、メッセージはなんのことでしょうかと考える必要があります。

### 情報源と行先

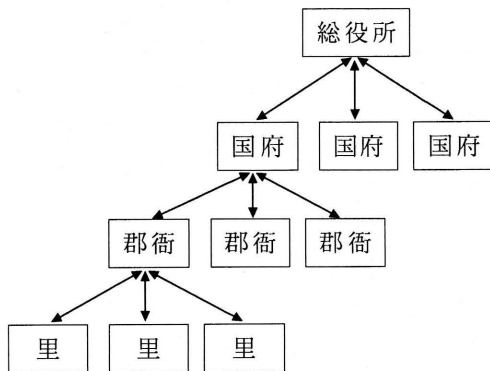
律令国家というのは、いわゆる中央主権国家なので、タテの要素が極めて強かったのです。ですから情報をも支配手段の一つとして使用していました。地方に対して命令文書（メッセージ）を出して国家を統治していました。平城宮にはいろいろな役所がおかれましたが、話をより分かりやすくするため、平城宮において

の諸役所を総役所と呼びたいと思います。その総役所は情報理論の情報源に当たっています（図3）。

その命令文書の行先はどこだったのでしょうか。総役所の下には国府、郡衙が、里（郷）がおかれました。総役所が送っていたメッセージの直接の行先は国府でした。国府はそのメッセージを受けて、そのメッセージのうえで、総役所の命令を具体化して、文書を作成して、さらに下の方、郡衙にメッセージを送ります。郡衙もまたその下の里にメッセージを送ることになっています。

けれども上から下へ命令の文書を送るだけではなくて、下から上の方へ報告することもあったので、場合によっては情報源と行先は逆になります。それによってフィードバック（コミュニケーション）が行われていました。

（図3）奈良時代における情報源と行先



## 通信路

現代通信路というのは、主にケーブルや空気や道路となっています。昔は、もちろんケーブルのようなものはまったくありませんでした。空気を通すものは人間の声、または人間の目に見られるもの以外はなにもありませんでした。律令国家には烽のネットワークが整備されましたが、それによって送信できるメッセージの内容は極めて限られていました。だから少しでも遠いところの場合、口コミか文字を記したモノを運ぶほかはありませんでした。情報（命令文書と報告文書）の交流に一番関心したのは総役所でしたので、道路の築造に大きな力を入れていました。その前にも地域ごとに自然に成り立ってきた道路がもちろんありましたが、全国的なネットワークは存在しませんでした（古代道路の最新研究としては吉川古弘文館の「古代を考える」シリーズの木下良編「古代道路」を参照）。当時、日本列島を「統一国家」の単位で取り上げたのはまず第一に中央政府でしたから、道路のネットワークも政府の指導で築造するようになりました。その目的は地域と地域を結ぶよりも平城宮（情報源）と地域（行先）を結ぶことでした。

道路ネットワークの築造によってすくなくとも三つの問題を解決することがで

きました。すなわち、軍隊の移動、物資の輸送、通信（情報）の伝達です。今日までに現物運送、軍隊の移動を中心に道路の研究が進んできましたが、今になって千田稔教授が指摘されましたように情報の面も検討の的となっています（「古代の情報ネット」。滋賀県立大学人間文化シンポジウム。平成八年十一月三日）。道路の通信路としての機能を考慮しないと、古代道路の本来的な意義も把握できないと歴史学会の大きな動きとして見ていただきたいのです。

奈良時代の律令国家はいくつかの膨大なプロジェクトを實行できましたが、そのなかでも道路ネットワークを築造、整備するのは、おそらく一番おきなひとつでした。中央集権国家の存在そのものが道路の全国的なネットワークなしでは全然ありえないと思ってもいいでしょう。ですから大化二年（六四六）の総合的な改革の計画でもある「改新の詔」のなかでは駅馬、伝馬のシステムがきわめて重視されていました。その具体的な実施は少しあとになったかもしれませんが、改革派の考え方をよく表しています。

駅馬の制度は七道を中心にしていましたが、基本的には三十里（一六キロ）ごとに一駅を設け、公使が乗る駅馬を置いていました。七道を大・中・小と区別して二十頭、十頭、五頭を置きました。大路は京と太宰府を結ぶ山陽道（外交の重

要性)、中路は東海道・東山道(東国の開発、蝦夷の征夷の重要性)で、そのあとの北陸道、南海道、山陰道、西海道は小路としました。伝馬は郡衙に五頭ずつおかれました。

そういたしますと、駅馬は京(平城宮の総役所)と国府、伝馬は郡衙と国府との間に情報伝達を確保しました。十世紀の「延喜式」によりますと、当時の駅数は四〇二でしたが、駅制衰退時期の記録ですから、八世紀の方はそれよりも多かったと想像できるでしょう。

律令国家は陸上ルートを重視することで、八世紀の官道の築造、駅の設定によって貢進ルートと情報ネットワークをほぼ整備したと見られます(水駅はほとんどありませんでした)。このネットワークは平安時代よりもよく働いていました。たとえば、奈良時代には太宰府―京間を四日三晩から五日四晩、陸奥―京間を八日七晩で達した飛駅使は、平安時代には前者が六日から十二日まで、後者は十三日もかかりました(交通・運輸、講座・日本技術の社会史、日本評論社、一九五、二〇三頁)。

駅路は計画的な道路で、できるだけはやく移動できるような直線的なものが多いです。そして地元の集落とは無関係に設置されました。その道路の幅は案外広

くて、駅路は六一三メートルで郡内の伝馬用の道路は六メートル以内でした。そして駅家が個人に馬、食料、まぐさなどを供給しなくて、六位以下無位の庶民に到っては駅に立ち入ることすら認めませんでした。これを考えてみますと、駅路の主な機能は政府関係の情報伝達にはかありませんでした。伝達された情報はなんのことだったのでしょか。その内容（メッセージ）の問題に入りたいと思います。

## メッセージ

### 一、メッセージの形態

通信路（駅路）を通して送信された律令中央国家関係のメッセージは文字の形をとっていました。文字が記される素材は紙と木材でした。すなわち、紙の公文書と木簡です。

同じ文字であっても、公文書と木簡の機能は明らかに違っています。そのなかのひとつはそれぞれの寿命です。紙の公文書は原則として永く保存されましたが、木簡は今の使い捨てのもののようにでした。ですから当時の当局はほんとうに大事



と思われた情報を全部紙に記していました。木簡の情報を紙にコピーするケースも見られています。

歴史のひとつの皮肉ともいえますが、奈良時代の公文書は木簡よりも少ないし、そして木簡はほとんど出土されていますので、そのギャップも一段と大きくなるでしょう。素材の違いはいまでもよく現れているからです。

よく知られていますが、木簡というのは、墨書された木片です。現在、約二〇万ぐらいの木簡が出土されました。出土場所は約三五〇にのぼり、全国的に使用されました。しかし七五%ぐらいは平城京に集中しています。平城京の調査は地方よりも進んでいると考慮しなければなりません。中央集権国家の性格としても当然なことでしょう。このタイプのような国家はモノを京に集中させるだけではなく、情報をも集中させます。その情報を手に入れて、その判断のうえで具体的な対策をとることになっています。

私のような日本文化史を研究している学者にとっては、木簡の一番大きな意義というのは当時の文字文化がかなり普及されていたことにあります。そういたしますと、紙の文書（古事記、日本書紀、律令、公文書等）は日本における文字文化の第一歩ではなくて、文字文化発展のひとつの結果となります。

木材に文字を記す風習は世界の国々に認められていますが（詳しくは岸俊男編の「ことばと文字」、日本の古代14、中央文庫、一九六、咒言（吾四頁参照）、極東としてはその原型はいうまでもなく中国です。紙のない時代につくられました。冊書とよんでいます。その冊書の木（竹）簡に一行か二行の文字を記し、それを何本も、場合によっては数百本をも紐でつないだものです。そうすると、まとまった長い文書にもなります。しかし三世紀以降は紙の普及にもなつて中国の冊書も見えなくなつて、木簡の使用分野も狭くなりました。ところが、中国文化の影響を受けた朝鮮半島を通じて木片の墨書の風習が日本までも伝えられました。

日本の一番古い木簡は七世紀の第二四半紀とされています。発掘調査のおくれもあつて、朝鮮木簡の数は一〇〇にしかのぼりませんが、その形態、出土条件、内容などから見ると、日本とほぼ同じであるというのが木簡の研究に優れている和田萃教授の結論です。けれども朝鮮と日本の木簡は中国の前代の冊書ではなくて晋代以後の木簡に似ています。その主な特徴は文書が一本の木片だけで記されています。狭いですから、表裏両面に文字を記したのは日本も朝鮮もまた一致しています。

そういう一致したところがあつても日本における木簡の役目は、当時の中国に

しても朝鮮にしてもそれよりも大きかったのではないかと私はみています。技術の面で遅れていましたので、紙の生産・供給もきわめて不十分で、しかたがなく木簡にひとつの重点がおかれました。

いまのところ、約二十万の木簡が出土されましたと先に申し上げましたが、その大多数（約七五％）は読めない状態にとどまっております。その理由は木簡使用に特徴があったからです。一本の木簡にデータをを入れて、不要になると、文字部分を削り取って、何度でも再使用できるようにします。当時の役人にとっては大きな利点がありましたが、我々としてはとても不自由なところがあります。使用済みになると、木簡を捨てました。捨てる場所はごみあな、溝、などでした。トイレ用のヘラとなるケースもありました。

## 二、メッセージとしての木簡の内容

木簡はいろいろありますが、国家的な性格をもっているものが圧倒的です。その内容の区別もさまざま考えられますが、定説はないらしいです。たとえば、鬼頭清明氏によると、文書の類と付け札に分けられます。文書木簡は人間にあてて情報を伝達する狭義の文書です。付け札は荷物の内容を中心にして、その荷物に

あてるのです。そのほか木簡のいろいろな区別がありますが、歴史学情報理論からみれば、どうなるのでしょうか。情報源、行先の観点から木簡の区別は次のようになります。

(イ) 平城宮（総役所）に勤務していた役人（役所）が宮内で書いたもの。その行先は同宮内に勤務している役人（役所）です。

(ロ) 地方から総役所あての租税の現物につけられた荷札です。これは国府、郡衙、場合によっては里で記されたものです。

情報源・行先とメッセージの内容をあわせると、前者のなかに次のものがあります。

### 一、物品の請求状

たとえば、東大寺の建設にあたって食料を請求する木簡。

### 二、物品の送り状。

物品が請求されているのにたいして、送ったことを知らせる木簡。

### 三、領収を示すもの。

請求した物品を受けたという木簡です。

以上は物の移動に関するコミュニケーションの木簡ですが、人の移動に関する

木簡もあります。

一、役人の呼び出し状。

役所が役人を呼び出すために記した召喚文書の木簡です。

二、労役の割り当ての報告。

たとえば、柱を抜く十一人の割り当ての木簡です。

三、パスポート

平城宮の出入りのパスポートと諸国の百姓は往来の箇所証明書。

ご覧のように木簡のルート（通信路）は宮内または上から下へ（下から上へ）でした。郡と郡、国と国との間にメッセージのやりとりはあまり見られないのです。それは律令国家の政治、経済、情報の実情をよく反映しているのではないかと私は思っています。すなわち、通信路のタテの働きは律令国家に一番重視されました。国内（郡内を除いて）のヨコのつながりが少なかったので、律令国家の将来の解体のいちばん大きな理由となりました。

## 情報の教育インフラストラクチャ

以上のようなタテの通信路を支えたのは道路、駅のネットワークだけではありません。木簡、紙の文書のやりとりを行っていた役人たちは読み書きがもできなかったら、このネットワーク全体が意味をまったく失ったでしょう。ですから律令国家は役人の教育に大きな力を入れました。すなわち、情報の流通を確保するには、通信路だけではなく情報源と行先をつくらなければなりませんでした。

日本においての文字文化を促す大きな最初の刺激となったのは大陸（中国と朝鮮）からの国家を統治する関係の知識を獲得する希望でした。旅行の少ない時代ですから、その知識を獲得・生かす方法は文字を勉強するほかはありませんでした。ですから遣唐使を送ることにあたって、外交訪問のほか、書物を獲得するのは遣唐使の大きな任務でした。帰国後、もってきた書物が写されて、普及しました。それによって外国文化を取り入れるひとつのパートナーが形づくられました。すなわち、知識を得る方法は人間の付き合いよりも書物を通じて得られるのです。奈良時代でも新羅の中国との七―八世紀の接触は日本のそれよりもずっと活発的であっても、日本人の中国についての知識は新羅とほぼ同じでした（岩波講座日

本通史。第四卷、七頁。

いうまでもなく、この知識を消化するには、日本国内のインフラストラクチャが必要でした。律令政府はこれを十分認識していたらしいです。京の大学、諸国の国学をつくって、同時に二、三千人ほどの学生が勉強していました。毎年、六〇〇人ぐらいが卒業しましたが、当時としては膨大な数字だと思われまます。木簡のなかにも宿題木簡ともいえるものが少なくありません。何回も同じ漢字をくりかえして書いたものです。

役人のほか、読み書きができたのは仏教関係者でした。仏教者にとっては、お経を読むのは大変大事でした。そして、仏教はお経を写すのを大きな徳としてみとめていますから、教育の普及を促進させました。仏教についての知識を普及させるには通信路（道路）を求めました。ですから、寺院・仏教者は道路、橋の建設に活躍していました。行基菩薩はその代表的な例でしょう（千田稔「天平の僧行基：異能僧をめぐる土地と人々」中公新書を参照）。

そういったしますと、情報の面においては律令国家と仏教の関心に一致点は多かったのです。奈良時代の国家仏教の形成過程もそれをよく裏づけています。

## 結 論

律令国家は通信系をつくるにあたっては大きな努力を払いました。すなわち、情報源と行先（平城宮の総役所と地方の諸役所）、通信路（道路のネットワーク）、文字コミュニケーションを支える教育ネットワークをつくることができました。しかし、その通信系は圧倒的に国家の枠内の、タテのかたちをとって、無理なところも多くて、庶民の生活、地方の経済に無関係ですから、律令国家衰退と同時にそれらのネットワークも全部衰退しました。しかし、文字の重要性・必要性はかなり多くの人々にじゅうぶん理解されたらしいです。ですから、平安時代の文字文化はかたちを変えましたが、違った通信源、行先、通信路を使いながら発展を遂げました。

最後になりますが、人文科学における情報研究の意義をもう一度強調したいと思います。人文科学のどんな学問であっても、まず第一に情報の性格を考えなければなりません。いま、われわれが取り扱っているデータはすべてむかしの情報です。歴史学の史料、文学の古典、宗教学の文献なども、そうです。言い換えれば、それぞれの文書はひとつのメッセージでした。現代の人文科学は著者（情報



源)に重点をおいていますが、それはきわめて不十分と思われています。奈良時代の情報というのはだれでも買える本が並んでいるいまの本屋とちがっています。むかしの文献はみんなのためのもではありませんでした。一定の定めた行先がかならずありました。ですから、著者のことだけではなくて、その文書の読み先(行先)をふくめて通信路のことを総合的に研究しなければなりません。そうしないと、メッセージの内容も正確に読み取れないでしょう。

\*\*\*発表を終えて\*\*\*

日本についての30年ちかい研究は、私にとってなにを意味しているのでしょうか。桂坂の日文研に4ヶ月間ほどを過ごしていたあいだ、窓から毎日移り変わる山林を望みながら、何回も思っていました。給料をもらって所得を増やすだけですか。いや、お金をほしがると、もっとよい仕事があるはずです。好奇心で日本を知るだけですか。それもそうではないらしい。それは学生時代としてはいいけれども、それだけではいまのころの栄養にならない。

日本を知るのは、ロシアをも知る。言い換えれば、ソトを見ないと、ウチも分からない。言い換えれば、他人の顔を見ないと、自分の顔の表情も読めない。言い換えれば、他人のころを分からないと、自分のころの動きも分からない。言い換えれば、生まれなかったら死ぬさえもできない。そうすると、なにができるかしら。言い換えれば・・・



日文研フォーラム開催一覧

回	年月日	発表者・テーマ
1	62.10.12 (1987)	アレッサンドロ・バロータ (ピサ大学助教授) Alessandro VALOTA 「近代日本の社会移動に関する一、二の考察」
2	62.12.11 (1987)	エンゲルベルト・ヨリッセン (日文研客員助教授) Engelbert JORIBEN 「南蛮時代の文書の成立と南蛮学の発展」
③	63. 2.19 (1988)	リー A. トンプソン (大阪大学助手) Lee A. THOMPSON 「大相撲の近代化」
4	63. 4.19 (1988)	フォスコ・マライーニ (日文研客員教授) Fosco MARAINI 「庭園に見る東西文明のちがい」
⑤	63. 6.14 (1988)	宋 曩七 (慶北大学校師範大学副教授) SONG Whi Chil 「大塩平八郎研究の問題点」
6	63. 8. 9 (1988)	セップ・リンハルト (ウィーン大学教授) Sepp LINHART 「近世後期日本の遊び—拳を中心に—」
⑦	63.10.11 (1988)	スーザン J. ネイピア (テキサス大学助教授) Susan NAPIER 「近代日本小説における女性像—現実と幻想—」
⑧	63.12.13 (1988)	ジェームズ C. ドビンズ (オベリン大学助教授) James C. DOBBINS 「仏教に生きた中世の女性—恵信尼の書簡—」

⑨	元. 2.14 (1989)	嚴 安生 (北京外国語学院日本語学部助教授) YAN An Sheng 「中国人留学生の見た明治日本」
⑩	元. 4.11 (1989)	劉 敬文 (遼寧大学日本研究所副所長) LIU Jingwen 「教育投資と日本の戦後経済高度成長」
⑪	元. 5. 9 (1989)	スザンヌ・ゲイ (オベリン大学助教授) Suzanne GAY 「中世京都における土倉酒屋－都市社会の自由とその限界－」
⑫	元. 6.13 (1989)	夏 剛 (京都工芸繊維大学助教授) HSIA Gang 「インタビュー・ノンフィクションの可能性－猪瀬直樹著『日本凡人伝』を手掛りに－」
⑬	元. 7.11 (1989)	エルンスト・ロコバント (東洋大学助教授) Ernst LOKOWANDT 「国家神道を考える」
⑭	元. 8. 8 (1989)	キム・レーホ (ソ連科学アカデミー・世界文学研究所教授) KIM Rekho 「近代日本文学研究の問題点」
⑮	元. 9.12 (1989)	ハルトムートO. ローターモンド (フランス国立高等研究院教授) Hartmut O. ROTERMUND 「江戸末期における疱瘡神と疱瘡絵の諸問題」
⑯	元.10. 3 (1989)	汪 向榮 (中国中日関係史研究会常務理事・日文研客員教授) WANG Xiang-rong 「弥生時期日本に来た中国人」
⑰	元.11.14 (1989)	ジェフリー・ブロードベント (ミネソタ大学助教授) Jeffrey BROADBENT 「地域開発政策決定過程を通して見た日米社会構造の比較」

⑱	元.12.12 (1989)	エリック・セズレ (フランス国立科学研究所助教授) Eric SEIZELET 「日本の国際化の展望と外国人労働者問題」
⑲	2. 1. 9 (1990)	スミエ・ジョーンズ (インディアナ大学準教授) Sumie JONES 「レトリックとしての江戸」
⑳	2. 2.13 (1990)	カール・ベッカー (筑波大学哲学思想学系外国人教師) Carl BECKER 「往生－日本の来生観と尊厳死の倫理」
㉑	2. 4.10 (1990)	グラント K. グッドマン (カンザス大学教授・日文研客員教授) Grant K. GOODMAN 「忘れられた兵士－戦争中の日本に於けるインド留学生」
22	2. 5. 8 (1990)	イアン・ヒデオ・リービ (スタンフォード大学準教授・日文研客員助教授) Ian Hideo LEVY 「柿本人麿と日本文学における『独創性』について」
23	2. 6.12 (1990)	リヴィア・モネ (ミネソタ州立大学助教授) Livia MONNET 「村上春樹：神話の解体」
㉒	2. 7.10 (1990)	李 国棟 (北京連合大学外国語師範学院日本語学部講師) LI Guodong 「魯迅の悲劇と漱石の悲劇－文化伝統からの一考察－」
㉓	2. 9.11 (1990)	馬 興国 (遼寧大学日本研究所副所長・日文研客員助教授) MA Xing-guo 「正月の風俗－中国と日本」
㉔	2.10. 9 (1990)	ケネス・クラフト (リーハイ大学助教授) Kenneth KRAFT 「現代日本における仏教と社会活動」

27	2.11.13 (1990)	アハマド M. ファトヒ (カイロ大学講師) Ahmed M. FATTHY 「義経文学とエジプトのベールバルス王伝説における主従関係の比較」
②⑧	3. 1. 8 (1991)	カレル・フィアラ (カレル大学日本学科長・日文研客員助教授) Karel FIALA 「言語学からみた『平家物語・巻一』の成立過程」
②⑨	3. 2.12 (1991)	アレクサンドル A. ドーリン (ソ連科学アカデミー東洋学研究所上級研究員) Aleksandr A. DOLIN 「ソビエットの日本文学翻訳事情－古典から近代まで－」
30	3. 3. 5 (1991)	ウイーベ P. カウテルト (ワーゲニンゲン大学研究員) Wybe P. KUITERT 「バロック・ヨーロッパの日本庭園情報 －ゲオルグ・マイステルの旅－」
③①	3. 4. 9 (1991)	ミコワイ・メラノヴィッチ (ワルシャワ大学教授・日文研客員教授) Mikołaj MELANOWICZ 「ポーランドにおける谷崎潤一郎文学」
32	3. 5.14 (1991)	ベアトリス M. ボダルト・ベイリー (オーストラリア国立 大学リサーチフェロー・日文研客員助教授) Beatrice M. BODART-BAILEY 「三百年前の京都－ケンペルの上洛記録」
③③	3. 6.11 (1991)	サトヤ B. ワルマ (ジャワハルラー・ネール大学教授・日文研客員教授) Satya. B. VERMA 「インドにおける俳句」
34	3. 7. 9 (1991)	ユルゲン・ベルント (フンボルト大学教授・日文研客員教授) Jürgen BERNDT 「ドイツ統合とベルリンにおける森鷗外記念館」

③⑤	3. 9.10 (1991)	ドナルド M. シーキンス (琉球大学助教授) Donald M. SEEKINS 「忘れられたアジアの片隅－50年間の日本とビルマの関係」
③⑥	3.10. 8 (1991)	王 曉平 (天津師範大学助教授・日文研客員助教授) WANG Xiao Ping 「中国詩歌における日本人のイメージ」
③⑦	3.11.12 (1991)	辛 容泰 (東国大学校文科大学教授・日文研来訪研究員) SHIN Yong-tae 「日本語の起源 －日本語・韓国語・甲骨文字との脈絡を探る－」
③⑧	3.12.10 (1991)	洪 潤植 (東国大学校教授) HONG Yoon Sik 「古代日本佛教における韓国佛教の役割」
③⑨	4. 1.14 (1992)	サウィトリ・ウィシュワナタン (デリー大学教授・日文研客員教授) Savitri VISHWANATHAN 「インドは日本から遠い国か？－第二次大戦後の 国際情勢と日本のインド観の変遷－」
40	4. 3.10 (1992)	ジャン = ジャック・オリガス (フランス国立東洋言語文化研究所教授) Jean-Jacques ORIGAS 「正岡子規と明治の随筆」
④①	4. 4.14 (1992)	リブシェ・ボハーチコヴァー (プラハ国立博物館日本美術 元キュレーター・日文研客員教授) Libuše BOHÁČKOVÁ 「チェコスロバキアにおける日本美術」
42	4. 5.12 (1992)	ポール・マッカーシー (駿河台大学教授) Paul McCARTHY 「谷崎文学の『読み』と翻訳：アメリカにおける 最近の傾向」

43	4. 6. 9 (1992)	G. カメロン・ハーストⅢ (ニューヨーク市立大学リーマン 広島校学長・カンザス大学東アジア研究所長) G. Cameron HURST Ⅲ 「兵法から武芸へー徳川時代における武芸の発達ー」
44	4. 7.14 (1992)	杉本 良夫 (オーストラリア・ラトロップ大学教授) Yoshio SUGIMOTO 「オーストラリアから見た日本社会」
④⑤	4. 9. 8 (1992)	王 勇 (杭州大学日本文化研究センター教授・日文研 客員助教授) WANG Yong 「中国における聖徳太子」
④⑥	4.10.13 (1992)	李 栄九 (大韓民国中央大学教授・日文研客員教授) LEE Young Gu 「直観と芭蕉の俳句」
④⑦	4.11.10 (1992)	ウィリアム D. ジョンストン (米国・ウェスリアン大学助教授・日文研客員助教授) William D. JOHNSTON 「日本疾病史考 - 『黴毒』の医学的・文化的概念の形成」
④⑧	4.12. 8 (1992)	マノジュ L. シュレスタ (甲南大学経営学部講師) Manoj L. SHRESTHA 「アジアにおける日系企業の戦略転換 ー技術移転をめぐるー」
④⑨	5. 1.12 (1993)	朴 正義 (圓光大学校師範大学副教授・日文研来訪研究員) PARK Jung-Wei 「キリスト教受容における日韓比較」
50	5. 2. 9 (1993)	マーティン・コルカット (米国・プリンストン大学教授・日文研客員教授) Martin COLLCUTT 「伝説と歴史の間ー北條政子と宗教」



⑤1	5. 3. 9 (1993)	清水 義明 (米国・プリンストン大学マーカンド名誉教授) Yoshiaki SHIMIZU 「チャールズ L. フリアー (1854~1919) とフリアー美術館 －米国の日本美術コレクションの一例として－」
⑤2	5. 4.13 (1993)	金 春美 (高麗大学教授・日文研来訪研究員) KIM Choon Mie 「日本近代知識人の思想と実践－有島武郎の場合－」
53	5. 5. 11 (1993)	タキエ・スギヤマ・リブラ (ハワイ大学教授) Takie SUGIYAMA LEBRA 「皇太子妃選択の象徴性 －旧身分文化との関連を中心として－」
54	5. 6. 8 (1993)	姜 希雄 (ハワイ大学教授・日文研客員教授) H.W.KANG 「変革と選択：10世紀の日本と朝鮮 －科挙制度をめぐって－」
⑤5	5. 7.13 (1993)	ツベタナ・クリステワ (ソフィア大学教授・日文研客員教授) Tzvetana KRISTEVA 「涙の語り－平安朝文学の特質－」
⑤6	5. 9.14 (1993)	金 容雲 (漢陽大学教授・日文研客員教授) KIM Yong-Woon 「和算と韓算を通してみた日韓文化比較」
⑤7	5.10.12 (1993)	オロフ G. リディン (コペンハーゲン大学教授・日文研客員教授) Olof G. LIDIN 「徳川時代思想における荻生徂徠」
⑤8	5.11. 9 (1993)	マヤ・ミルシンスキー (スロベニア・リュブリアナ大学助教授・日文研客員助教授) Maja MILČINSKI 「無常観の東西比較」

59	5.12.14 (1993)	ウィリー・ヴァンドゥワラ (ベルギー・ルーヴァン・カトリック大学教授・日文研客員教授) Willy VANDE WALLE 「日本・ベルギー文化交流史 -南蛮美術から洋学まで-」
60	6. 1.18 (1994)	J. マーティン・ホルマン (ミシガン州立大学連合日本センター所長) J. Martin HOLMAN 「自然と為作 -井上靖文学における『陰謀』-」
61	6. 2. 8 (1994)	マイヤ・ゲラシモワ (ロシア科学アカデミー東洋学研究所研究員) Maya GERASIMOVA 「外から見た日本文化と日本文学 -俳句の可能性を中心に-」
62	6. 3. 8 (1994)	オギュスタン・ベルク (フランス・社会科学高等研究院教授・日文研客員教授) Augustin BERQUE 「和辻哲郎の風土論の現代性」
⑥3	6. 4.12 (1994)	リチャード・トランス (オハイオ州立大学助教授) Richard TORRANCE 「出雲地方に於ける読み書き能力と現代文学、1880~1930」
64	6. 5.10 (1994)	シルバーノ D. マヒウォ (フィリピン大学アジア・センター準教授) Sylvano D. MAHIWO 「フィリピンにおける日本現状紹介の諸問題」
65	6. 6.10 (1994)	劉 建輝 (中国・南開大学副教授・日文研客員助教授) LIU Jian Hui 「『魔都』体験-文学における日本人と上海」
66	6. 7.12 (1994)	チャールズ J. クイン (オハイオ州立大学準教授・東北大学客員教授) Charles J. QUINN 「私の日本語発見-王朝文を中心に-」

67	6. 9.13 (1994)	フランソワ・マセ (フランス国立東洋言語文化研究所教授・日文研客員教授) François MACE 「幻の行列－秀吉の葬送儀礼－」
⑥8	6.11.15 (1994)	賈 蕙萱 (北京大学助教授・日文研客員助教授) JIA Hui-xuan 「中日比較食文化論－健康的飲食法の研究－」
69	6.12.20 (1994)	彭 飛 (日本学術振興会特別研究員) PENG Fei 「日本語の表現からみた－異文化摩擦のメカニズム－」
⑦0	7. 1.10 (1995)	ミハイル・ウスペンスキー (エルミタージュ美術館学芸員・日文研客員助教授) Michail V. USPENSKY 「根付－ロシア・エルミタージュ美術館のコレクションを中心－」
⑦1	7. 2.14 (1995)	嚴 紹璽 (北京大学教授・日文研客員教授) YAN Shao Dang 「記紀神話における二神創世の形態－東アジア文化とのかかわり－」
⑦2	7. 3.14 (1995)	王 家驊 (中国・南開大学教授・日文研客員教授) WANG Jiahua 「渋沢栄一の『論語算盤説』と日本的な資本主義精神」
⑦3	7. 4.11 (1995)	アリソン・トキタ (オーストラリア・モナシュ大学助教授・日文研客員助教授) Alison TOKITA 「日本伝統音楽における語り物の系譜－旋律型を中心－」

⑦4	7. 5. 9 (1995)	リュドミーラ・エルマコーワ (ロシア科学アカデミー東洋学研究所極東文学課長) Lioudmila ERMAKOVA 「和歌の起源－神話と歴史－」
75	7. 6. 6 (1995)	パトリシア・フィスター (日文研客員助教授) Patricia FISTER 「近世日本の女性画家たち－」
76	7. 7.25 (1995)	崔 吉城 (広島大学総合科学部教授) CHOI Kil-Sug 「『恨』の日韓比較の一考察」
⑦7	7. 9.26 (1995)	蘇 徳昌 (奈良大学教養部教授) SU Dechang 「日中の敬語表現」
⑦8	7.10.17 (1995)	李 均洋 (西北大学副教授・日文研来訪研究員) LI Jun Yang 「一日・中比較文化考－雷神思想の源流と展開」
79	7.11.28 (1995)	ウィリアム・サモニデス (カンザス大学助教授・日文研客員助教授) William SAMONIDES 「豊臣秀吉と高台寺の美術」
⑧0	7.12.19 (1995)	タチヤーナ L. ソコロワ＝デリュージナ (翻訳家・日文研来訪研究員) Tatyana L. SOKOLOVA-DELYUSINA 「俳句の国際性－西欧の俳句についての一考察－」
81	8. 1.16 (1996)	ジョン・クラーク (シドニー大学助教授・日文研客員助教授) John CLARK 「日本の近代性とアジア：絵画の場合」

⑧2	8. 2.13 (1996)	ジェイ・ルービン (ハーバード大学教授・日文研客員教授) Jay RUBIN 「京の雪、能の雪」
83	8. 3.12 (1996)	イザベル・シャリエ (神戸大学国際文化学部外国人教師) Isabelle CHARRIERE 「日本近代美術史の成立 - 近代批評における新語 -」
⑧4	8. 4.16 (1996)	リース・モートン (ニューキャッスル大学教授・日文研客員教授) Leith MORTON 「日本近代文芸におけるゴシック風小説」
⑧5	8. 5.28 (1996)	マーク・コウディ・ポールトン (ヴィクトリア大学助教授・日文研客員助教授) Mark Cody POULTON 「能における『草木成仏』の意味」
⑧6	8. 6.11 (1996)	フランシスコ・ハビエル・タブレロ (慶應義塾大学訪問講師) Francisco Javier TABLERO 「社会的構築物としての相撲」
87	8. 7.30 (1996)	シルヴァン・ギニヤール (大阪学院大学助教授) Sylvain GUIGNARD 「筑前琵琶 - 文化を語る楽器」
88	8. 9.10 (1996)	ハーバート E. プルチョウ (カリフォルニア大学ロサンゼルス校教授・日文研客員教授) Herbert E. PLUTSCHOW 「怨霊の領域」
⑧9	8.10. 1 (1996)	王 秀文 (中国・東北民族学院助教授・日文研客員助教授) WANG Xiu-wen 「シャクシ・女・魂 - 日本におけるシャクシにまつわる民間信仰 -」

90	8.11.26 (1996)	王 宝平 (中国・杭州大学日本文化研究所副所長・ 日文研客員助教授) WANG Bao Ping 「明治前記に来日した中国人の外交官たちと日本」
⑨①	8.12.17 (1996)	陳 生保 (中国・上海外国語大学教授・日文研客員教授) CHEN Shen Bao 「中国語の中の日本語」
⑨②	9. 1.21 (1997)	アレキサンダー N. メシェリャコフ (ロシア科学アカデミー東洋学研究所教授・日文研来訪 研究員) Alexander N. MESHCHERYAKOV 「奈良時代の文化と情報」
93	9. 2.18 (1997)	郭 永喆 (韓国・漢陽大学文科大学長・日文研客員教授) KWAK Young-Cheol 「言語から見た日本」
94	9. 3.18 (1997)	マリア・ロドリゲス・デル・アリサル (スペイン・マドリード 国立外国語学校助教授・日本学研究所所長) Maria RODRIGUEZ DEL ALISAL 「弁当と日本文化」
⑨⑤	9. 4.15 (1997)	ミケーレ・マルラ (カリフォルニア大学ロサンゼルス校 準教授・日文研客員助教授) Michele F. MARRA 「弱き思惟 - 解釈学の未来を見ながら」
96	9. 5.13 (1997)	デニス・ヒロタ (京都浄土真宗翻訳シリーズ主任翻訳家 バークレー仏教研究所準教授) Dennis HIROTA 「日本浄土思想と言葉 - なぜ一遍が和歌を作って、親鸞が作らなかったか」
⑨⑦	9. 6.10 (1997)	ヤン・シコラ (チェコ・カレル大学助教授・日文研客員助教授) Jan SYKORA 「近世商人の世界 - 三井高房『町人考見録』を中心に -」

98	9. 7. 8 (1997)	鶴田 欣也 (カナダ・ブリティッシュコロンビア大学教授・ 日文研客員教授) Kinya TSURUTA 「向こう側の文学-近代からの再生-」
99	9. 9. 9 (1997)	ポーリン ケント (龍谷大学助教授) Pauline KENT 「『菊と刀』のうら話」
100	9.10.14 (1997)	セオドア ウィリアム グーセン (カナダ・ヨーク大学準教授・日文研客員助教授) Theodore William GOOSSEN 「『日本文学』とは何か-21世紀に向かって」

○は報告書既刊

\*\*\*\*\*

発行日 1997年12月25日  
編集発行 国際日本文化研究センター  
京都市西京区御陵大枝山町3-2  
電話 (075) 335-2048

問合せ先 国際日本文化研究センター  
管理部・研究協力課

\*\*\*\*\*

1997 国際日本文化研究センター





■ 日時

1997年1月21日(火)

午後2時～4時

■ 場所

国際交流基金 京都支部

